



NANPU Kagoshima University Library Bulletin

- 1 附属図書館長就任にあたって
- 2 附属図書館長退任にあたって
- 3 岩元文庫の紹介
- 4 岩元文庫訪書記
- 5 岩元文庫の魅力
- 6 平成19年度貴重書公開
- 7 『島津久光 人と学問』講演要旨
- 8 鹿児島大学リポジトリの紹介
- 9 学生モニターの活動
- 10 本学関係者から寄贈された著書
- 11 トピック

附属図書館長就任にあたって

附属図書館長 井上 佳朗

はじめに

私はこの4月に図書館長に就任したばかりで、まだ附属図書館が果たすべき役割の全てを理解しているわけではありませんが、現時点での私の考えの一端を、利用者の皆さんにお伝えしておきたいと思います。

学生・教職員の皆さんが生活の大半を過ごす大学は、知識と経験によって学生の成長を促す教育の場であり、既存の知識から新しい知識や価値あるいは技術などを生み出す研究の場でもあります。また知識とその応用によって社会に貢献する公的機関でもあります。

この教育・研究・社会貢献において、キーとなるのは「いかに知識を活用するか」ということで、知識を賢く使いこなす能力が教育や研究の質を左右すると考えています。附属図書館は、良質な知識を活用する拠点として教育研究活動を支え、また自らもそれらの活動と社会貢献に、積極的に参加していくべきだと考えています。

情報化社会と図書館-目利きの基本は優れたものにふれること-

現代社会では大量の情報に簡単に接する手段として、インターネットが多くの人々に利用されています。それ以外にもテレビ、新聞、雑誌などの情報媒体によって、様々な情報が大量に満ちあふれています。

しかし、その中から優れた情報を探し出し活用することは、至難の業と言わなければなりません。情報の持つ価値を見極めるには優れた洞察力が必要です。この洞察力を磨く有

力な方法は、その道に秀でた人々によって、吟味・選別された優れた知識に接することです。

その点、大学図書館は多種多様な情報の中から、書籍や電子ジャーナルなどのように知識レベルで整理された良質な情報を収集し提供していますので、学生の皆さんにとっては、図書館にまずアプローチしてみることが、学問的に優れた情報を見分ける第一歩となるはずで

です。学生の皆さんには、先人たちが残した多くの優れた知識に接し、その知識をもとに友人同士あるいは教員とのコミュニケーションを積極的にを行い、知性を磨き優れた洞察力を身につけてほしいと願っています。図書館としては、そのようなコミュニケーション機能を持ったスペースを館内に実現したいと考えています。

授業との連携-学習支援型の図書館機能の強化-

これまでの図書館は、利用者が来て目的の書籍を閲覧するのを支援することが、中心のように考えられてきましたが、情報を使いこなすという意味では、閲覧に至るまでの支援とともに、閲覧後の学習を支援するための場所と機会も、同時に提供する必要があると考え

ます。知性は議論によって鍛えられます。授業における疑問や与えられた課題の解決のプロセスにおいて、図書館にストックされた良質な知識をベースに、ディスカッションを行うことが、知性を鍛える堅実かつ効果的な方法で

あると考えています。友人たちと議論できるグループ学習の場を、是非充実させていきたいと考えています。

これまでもレファレンスサービスやシラバス掲載参考図書の整備、共通教育授業「情報活用基礎」における図書館利用の講義など、学生の皆さんの学習を支援する方策をとってきましたが、効果的な学習支援の実現には、授業との一層の連携はかせません。事前事後学習の効果を高めるためにも、教員の皆さんには授業の中で、学生の皆さんに対して、図書館の利用を促す工夫を、是非していただきたいと思います。

電子図書館的機能への対応

これまで、鹿児島大学附属図書館は、教育・研究支援のために、多くの書籍・雑誌などの文献を収集してきました。近年は、高度情報ネットワーク社会への対応に力を入れ、①電子ジャーナルの導入、②インターネットを使った文献検索システムの構築、③機関リポジトリ（鹿児島大学リポジトリ）の充実など、電子図書館的機能の向上を図っています。

このうち特に注目されているのが鹿児島大学リポジトリで、これは、本学教員の研究・教育および社会活動の成果を広く社会に公開・発信する仕組みであり、知の拠点としての大学の役割を果たす有力な方法の一つであると同時に、大学の認知度、社会的評価を高めることにつながります。教員にとっては研究成果を迅速かつ広範囲に公開する機会が増大し、社会的貢献、社会的説明責任を果たすことができます。学生の皆さんにとっては、鹿児島大学リポジトリにアプローチすることで、本学教員の研究内容などを具体的に知ることができます。

今後、リポジトリへの登録コンテンツ数、アクセス回数、ダウンロード回数などは、大学評価において、教育・研究活動、社会貢献、情報発信能力等の評価指標として利用されることとなります。そのような観点からも、鹿児島大学におけるリポジトリの充実は重要な課題と言えます。

なお、注目されているという意味では、電子ジャーナルも見逃せませんが、これについては別の機会に述べたいと思います。

求められる図書館の自己変革-利用者中心の図書館へ-

大学の知的インフラを支える中核機関であ

る図書館は、教員・学生の皆さんに積極的に利用されて、初めてその役割を果たすことができます。図書館もパソコンと同じで、使わなければ単なる巨大な箱に過ぎません。利用者から支持されない組織は衰退していく運命にあり、図書館として例外ではありません。

使い勝手がよく利用者満足度の高い魅力的な図書館を実現するためには、利用者の要求を把握し的確に答える利用者中心の図書館を目指すことです。

書籍や電子ジャーナルの充実、閲覧・学習環境の向上などお金のかかることも多いのですが、まずなすべきことは、図書館職員が利用者中心の発想を身につけることと考えています。そのためには、利用者との接点を拡大しコミュニケーションを大切にし、自己変革を成し遂げねばなりません。

図書館職員はその道の専門家として与えられた業務を確実に成し遂げていく技能とともに、利用者の要望・期待に積極的に応えていくホスピタリティが求められています。そのための方策として、上層階にもサービスカウンター（ヘルプ・デスク）を配置し、利用者の要望に迅速に答えられるようにするのも一案です。

最後に

以上、いくつかの点について述べてきましたが、図書館としては今後も創意と工夫によって魅力的な教育研究基盤としての役割を果たしていきたいと考えています。

利用者の皆さんには、是非、積極的に図書館に足を踏み入れてほしいと思います。1日1回とは言いませんが、1週間に数回は図書館に足を運ぶ習慣を身につけてほしいと思っています。多くの方が図書館を利用し、多くの意見を寄せてくれることによって、図書館機能は高められます。また図書館員のホスピタリティの向上やセンスアップも図られ、図書館はさらに使い勝手のよいものになることができます。利用者の皆さんは、是非、図書館職員に利用のための支援要請はじめコミュニケーションを積極的にしてほしいと願っています。

(いのうえ よしろう 法文学部教授)

附属図書館長退任にあたって

前附属図書館長 早川 勝光

私は2期4年間にわたって法人化後最初の附属図書館長の責任を負ってきた。多くの要望に応えられないばかりか、法人化前に比べてサービスを縮小せざるを得ない事柄も少なくなかったことは残念である。

以下、現状と改善の必要について私見を述べる。

学生用図書

学習用図書の受入数は、H15年度は8,226冊(39,171千円)であったものが、法人化後はH16年度2,217冊(11,196千円)、H17年度4,905冊(14,431千円)、H18年度3,018冊(15,598千円)となった。受入数の減少は法人化後の予算縮減によるものではあるが、一部は電子ジャーナル等の研究インフラの確保を優先せざるを得ない側面もあった。シラバス対応図書は必ず整備したが、学習用図書の新規導入の削減は学生サービスの低下をもたらしたことになる。

学習用図書経費は授業料に対する対価の一つと考え、学生1人あたりの購入経費や授業料収入に対する割合を定めて、学生の学習環境の劣化を招かないようにしている大学も多く存在する。大学の総経費削減の中、削減してはならない経費を定めることは極めて重要なことであろう。鹿児島大学の場合、学生1人あたりの学習用図書経費は、法人化前に3,900円であったものが法人化後急激に減少し、現状では1,600円程度となっている。

電子資料

ここ数年の間に学術文献データベースや電子ジャーナルが研究活動に必須のインフラとなった。研究成果は、発表した学術論文で評価される。研究の計画・実施段階においても、データを整理・発表する際にも、既報の論文との照合は必須である。したがって、

データベースと電子ジャーナルは必須の情報インフラであり、その充実ぶりは研究活動の差別化を産み出す。ところが、充実の必要はあっても、これらの電子資料の価格は毎年5%以上の上昇を続けているので、大学予算が削減される中では現状を維持することが困難となりつつある。

学術文献データベースは研究活動に有益であるばかりでなく、組織や研究者の研究活動を評価するツールとしても利用されており、発表論文数や被引用数などを組織や個人ごとに調査することができる。したがって、評価組織や多くの大学運営組織は研究の特性を評価するツールとして利用している。インパクトファクタのような学術雑誌についての評価指標ではなく、機関や部局、著者や各論文の被引用件数の推移などを調べることができるので、大学の研究状況や個性に関する根拠資料の作成などに有効活用することが必要である。

情報発信

鹿児島大学の学術成果をWEB発信する鹿児島大学リポジトリがスタートした。これにより、これまで限られた世界でしか公開されてこなかった大学の研究報告(紀要)や博士論文などの可視性が高まり、これらの情報が商業学術雑誌では入手できない情報であるため、アクセス数が急速に増大している。また、学術雑誌の発表論文をオープンアクセス可能な機関リポジトリに登録しておく、すべての人々への可視性が高まりその論文の被引用件数が増大することが期待できる。

キーワードによる情報検索が基本となっている現在、ヤフーやグーグルでもヒットする機関リポジトリの可視性は有料データベースよりも高くなっている。研究成果を広く公開

する手段として機関リポジトリの価値は今後ますます高くなるであろう。

図書館サービス

附属図書館にはサービス部門と管理部門が存在する。企業であれば顧客相手の営業部門が最も重要であるように、図書館にとっても利用者である学生や研究者へのサービス部門が重要である。附属図書館では利用者の声をサービスに活かすべく、アンケートや学生モニター等でサービスの現状に対する利用者による評価を実施し、可能なものは実施してきた。

一方、サービスの向上・改善には、利用者と職員がコミュニケーションの取れるよう職員の館内配置を行うことが必要である。館内の利用者と職員がコミュニケーションを密にすることによって、利用者のニーズに直ちに対応できる。商店が店内に広く店員を配置しているように、閲覧スペースが4階に及ぶ中央図書館には各階にレファレンスを含むサービスカウンターを設置して、利用者と職員の様子が互いに見え、コミュニケーションの取れる空間配置に改善する必要があるだろう。

市民サービス

鹿児島大学附属図書館は一般市民にも開かれている。また、所蔵している貴重書の公開と関連講演会を行っている。この事業は平成11年に始められ、平成20年度には第10回を数える。中央図書館のほかに県内各地で開催して市民文化の向上に貢献している。

さらに、夏休みに行われる「子ども霞が関見学デー」に呼応して、図書館の「こども見学デー」を行ってきた。ヤフー、グーグル等情報検索が日常生活に浸透している現在、大量の情報の中から確かな情報を探す訓練と重要性をゲーム感覚で体験するものであり、図書館業務の専門性を子どもサービスと関連づけた企画である。

これら貴重書展示も子ども見学デーも、PDCAサイクルに基づく評価によって次期中期計画立案段階には、さらに市民アピールの高いものに衣替えする必要があるだろう。

結び

4年間に及ぶ附属図書館長として十分な責務を果たしたとはいえ部分が多く、任命者である学長にもまた教職員にも申し訳ないことであった。

科学技術・学術審議会は、『学術情報基盤の今後の在り方について（報告）』（平成18年3月）の中で「大学図書館は、大学本来の目的である高等教育と学術研究活動を支える重要な学術情報基盤であり、大学にとっては必要不可欠な機能を持つ大学の中核を成す施設である」と述べる。

館長を初めとする図書館職員、運営委員会を構成する教員が科学技術・学術審議会の記述を真摯に受け止めて、鹿児島大学附属図書館の利活用に今後とも邁進することを期待している。

(はやかわ かつみつ 名誉教授(元理学部教授))

■岩元文庫について

附属図書館には玉里文庫のほかにも特殊文庫があり、今回、その一つを紹介いたします。

岩元文庫の紹介

高津 孝

鹿児島大学附属図書館は、複数の優れた特殊文庫を所蔵しているが、岩元文庫もその一つである。岩元文庫は、旧制第一高等学校（現在の東京大学）教授岩元禎（1869-1941）の蔵書に基づく。昭和16年、岩元禎氏の逝去後、蔵書は鹿児島県の所蔵となったが、昭和30年7月、鹿児島大学と鹿児島県立大学統合に際して、鹿児島県より鹿児島大学に寄贈された。岩元禎氏は、明治2年5月3日鹿児島県士族岩元基の長男として生まれ、鹿児島高等中学造士館予科、第一高等中学校を経て、明治27年帝国大学文科大学哲学科を卒業、明治32年より第一高等学校のドイツ語教員、明治36年同教授となった。夏目漱石『三四郎』中の広田先生のモデルとされている。岩元文庫については、鹿児島大学附属図書館によって、昭和32年に洋書の部、次いで漢籍の部の目録が謄写版で刊行され、昭和43年に両者を併せた活字版目録が刊行された。西洋哲学の専門家でありながら、中国の古典籍に興味を感じ、収集に努めた成果である岩元文庫の漢籍は、明治以降の個人収集の漢籍蔵書のなかでも出色のものである。今回、現在の日本を代表する中国書誌学の研究者によって、岩元文庫の特色を説いた文章が書かれたことは、文庫を所蔵する鹿児島大学にとっても、たいへん喜ばしいことである。

以下、今回、岩元文庫の紹介の労を取られたれた二先生についてご紹介する。

井上進先生は、京都大学文学部東洋史のご出身で、同大学院、三重大学助教授を経て、現在、名古屋大学文学部教授。専門は、明清の学術思想史及び宋代から清朝までの中国出版文化史である。中国出版文化史に関しては、『中国出版文化史』（名古屋大学出版会、2002年）、『書林の眺望 伝統中国の書

物世界』（平凡社、2006年）と、既に著書を2点刊行されている。広い視野と該博な知識を有する先生であるが、特に明代の漢籍については、日本で一番多く実地調査をされていると伺っている。今回、ご執筆いただいた文章中にも、明代の漢籍に関する知見が縦横に組み込まれ読み応えのあるものとなっている。

高橋智先生は、慶應義塾大学文学部中国文学のご出身で、同大学院を経て、現在、慶應義塾大学附属研究所斯道文庫主事、准教授を務められ、専門は、中国目録学、漢籍書誌学である。斯道文庫は、昭和13年12月に株式会社麻生商店（現麻生セメント）社長麻生太賀吉氏によって設立された財団法人斯道文庫（福岡市）を前身とし、昭和33年、文庫蔵書約7万冊が、麻生氏によって慶應義塾に寄贈され、改めて慶應義塾の附属施設として、「日本及び東洋の古典に関する資料の蒐集保管並びにその調査研究を行うこと」を目的として出発した研究所である。したがって、高橋先生は、斯道文庫に所属することで、一貫して漢籍の整理研究に従事されてきた訳である。その中国古典籍に関する情熱と知識は、東方書店の雑誌『東方』に現在連載中の「書物の生涯—続書誌学のすすめ」に遺憾なく披瀝されている。今回、わざわざご執筆いただいた文章中にも、氏の書物への愛情があふれている。

二先生の文章を得て、岩元文庫の蔵書のすばらしさがより多くの人に理解されることを願ってやまない。

（たかつ たかし 法文学部教授）

岩元文庫訪書記

名古屋大学 井上 進

岩元文庫の漢籍は、以前からずっと気になっていた。目録を通じてこの文庫の存在を知り、これはぜひ一度見ておきたい、とそう思うようになったのは、もう十年余りも前のことである。だがあれこれの事情もあったし、なにより生来ものぐさというか、グズな私は遷延してなかなか決しなかった。とはいえ、ここの本をいつまでも放っておくべきではない、という気持ちは常にあって、それが平成十八年の冬、ふとした拍子に私を飛行機に乗せ、長い間抱えこんでいた宿題をついに解消せしめた。この訪書、わずか足かけ三日の「走馬看花」（大急ぎでざっと見ただけ）ではあったけれど、予期したとおり収穫はなかなかあって、まさに「この行を虚しうせず」であった。

だがそれにしても、この文庫のことをなぜ私はずっと気にしていたのか。ここに存する漢籍は、もともと中国学畑の人ではない、西洋哲学を専門とされた岩元禎氏が、大正から昭和初年くらいにかけて収集された個人蔵書であり、量的には邦儒の著作若干を含めて四千四百冊ならず、ありていに言えば小規模なものである。しかもこの冊数は、『皇清経解』とか『二十一史』といった、大部な叢刻の書を含むがゆえのもので、そうしたものの一部と数えるならば、すべて二百部ばかりにしかない。

にもかかわらず、はじめて『岩元文庫目録』を見た時、私はちょっとびっくりした。清代考証学者の有名な著作や、考証学の発達とそれともなって益々さかんとなった古版愛好の風によって、次々と刊行された影宋

（景宋、宋版をもとの姿そのままに影刻＝覆刻した）本などが、翻刻ではなく原刻の精本で集められ、また和刻や明版にしても、前者についてはやはり影宋本の類が多く、後者に

ついても明末の坊本俗書（営利出版の通俗的な書物）などとははっきり異なる、版本的に相当の価値ある本ばかりだったからである。

まず考証学者の著作で言うと、たとえば清代の詩経研究を代表する胡承珙の『毛詩後箋』、および陳奂の『詩毛氏伝疏』はともに道光原刊本。しかも前者は原刊のほか、光緒刊の重校本を備え、後者は『毛詩説』のみを附録する早期の印本に加え、後年になって刊行された三種の著作をも附録した一本まで、つまり附録にのみ相違がある同版を二部揃えている。こんなところで自分のことを引き合いに出すのもどうかと思われるのであるが、私の場合、前者は皇清経解続編本、後者は光緒重刊本（と近年の洋装影印本）、どちらも至って平凡な、ありふれた本でもつのが精一杯、まったくこの本とは比較にならない。

こうした例は他にもあれこれあって、やはり清代の『論語』『孟子』研究を代表する劉宝楠の『論語正義』と焦循の『孟子正義』の場合、前者は同治原刊本が通行するものの、それはまず民国中金陵（南京）存古書舎印本であるのに対し、ここのは目録の記載による限り、清代の早印（ないし初印）本だし、焦循の『孟子正義』も翻刻ではなく道光原刊本である。また考証学の祖と言ってよい顧炎武の名著『日知録』の注釈本で、今や定本となっている黄汝成『日知録集釈』は、翻刻が数多くあってそれらが通行しているのだが、ここにあるのは道光原刊で、しかも当初は不全本しか得られなかったのを、後に改めて完本を購ったらしく、不全と完本の二部が著録されている。

ついで影宋本の類を少しだけ挙げておけば、文庫目に著録される経部礼類の書はわずか三部、ただしその三部『儀礼』『儀礼疏』『礼記正義』は、いずれも清代ないし民国の

著名蔵書家が、自蔵の宋版を影刻した有名な精本だし、和刻についても、そうした例は一二に止まらない。たとえば清代の影宋本をさらに影刻した『孟子音義』とか、あるいはわが国のもっとも優れた考証学者、狩谷掖齋かりや えきさいが蔵していた影宋鈔本に拠って、その友人松崎こうどう慊堂が校刊した『爾雅』、といったものがこれである。

またやはり松崎氏の校刊した『縮刻唐開成石經』は、九世紀前半に建てられた石經（儒教經典が刻された石碑）の拓本を縮小して版本としたもので、いかにも考証学者の、經書のより古いテキストを求めた篤実な学者の出版物である。しかもこの松崎氏の記念すべき業績につき、ここには『春秋三傳』だけを存した一部に加え、おそらく後に改めて買いなおしたのであろう、四十一冊の完全な揃いがあり、さらにこれとは別に、民国になってから中国で刊行された『開成石經』まで備えられている。

近世までの比較的小規模な個人蔵書の場合、そこに含まれる中国刊本はもともとさして多くなく、またある程度の数があったとしても、いわば玉石混淆となるのがふつうである。つまり中国の学界ではまったく問題にされないような、通俗的な書物が必ずいくらかは混じり、正統的な古典著作についても、版本的吟味といったものはまづ行なわれていない。近世の当時、版本につき相当の知識をもつ人というのは例外的であったし、また実際問題として、吟味をしようにもやりようがない、というのも舶載される中国刊本には限りがあって、あれこれ選択するだけの幅に乏しかったからである。これは大名や藩校の蔵書でも基本的には同じことで、ただその規模がある程度大きくなることから、石のみならず玉もその数が多くなる、というにすぎない。

なお断っておけば、版本的選択をほとんど経ず、書種についても雅俗をあまり分かたぬ近世の蔵書というのは、そのゆえに価値が低

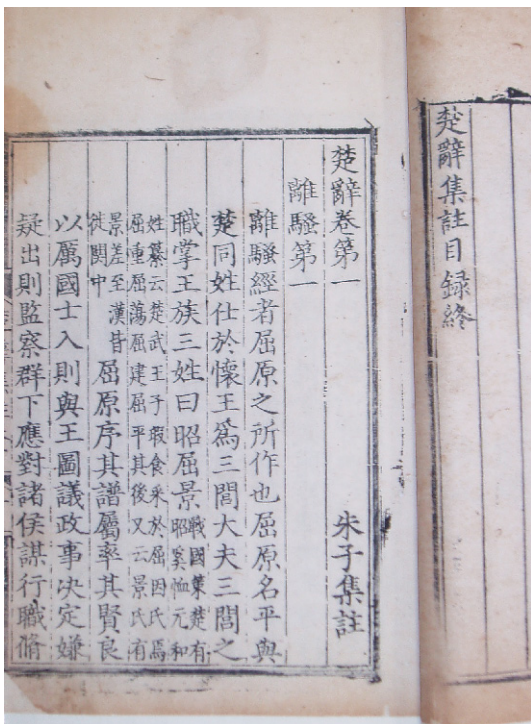
いのでは必ずしもない。「玉石混淆」の玉の方、版本的価値の高い善本は言うに及ばず、かつての中国ではつまらぬものとさげすまれた石の方にしても、それらは石であったがために本国では粗末にされ、かなりの部分が失伝してしまったのに対し、わが国ではそれもまた舶来の「唐本」ということで大事に保存され、結果として、今や日本にしかのこっていないものがずいぶん多いのである。しかもその所謂「つまらぬもの」というのは、あくまで前近代における評価であるにすぎず、それが今日でもそのまま通用しているのではない。たとえば明版の通俗小説とか、明末清初期の地方志などというのは、かつての中国では疑問の余地なく石であったが、今や石どころではない、正真正銘の玉と評価されよう。

岩元文庫の漢籍は、こうした近世の、あるいは近世的特徴を引きつぐ蔵書とははっきり異なるものである。それは大半が中国刊本からなっていて、和刻はわずかな割合を占めるだけ、本邦の鈔本（写本）に至っては皆無だし、その中国刊本については、影宋本をはじめ版本的に優れるものを特に意識して集めている。また内容から言っても、ここには俗書の類、あるいは趣味的、遊戯的な書物はほとんどなく、だいたいから言えば古典的、学問的な書物ばかり、それも宋学（宋明理学）には極端なまでに冷淡であって、『書集伝』とか『詩集伝』といった新注（朱子学系）の經書類、あるいは『小学』とか『近思録』しつちゅうといったものは、わずかに不全の『四書集注』を唯一の例外として、一切ない。

目録を見ていささか驚いたというのは、そこに著録されるところが上述のような特徴もっていて、各地に散在するふつうの小蔵書とははっきり撰を異にしていたからであるが、実のところそれだけなら、私にとって格別気になる存在とはならなかったろう。岩元氏は中国学の専門家ではなかったし、また旧制高校の教授といえ、今の大学教授などと

は違うにせよ、特別財に豊かというわけでもなかったろうから、その蔵書中に格別珍しい書物（著作）というのはなく、また氏の当時でもきわめて高価であった、宋元の古版なども無縁である。これまでに言及した版本のあれこれは、もとよりいずれもよい本であり、今日では容易に得られぬものばかりではあるけれど、善本というのとはやはり異なる。私がどうしても見ておきたいと思ったのは、版本にすこぶる通じた岩元氏が、その眼で選んだ明版書のあれこれであり、その中にはたしかに善本と言ってよいものがあつた。

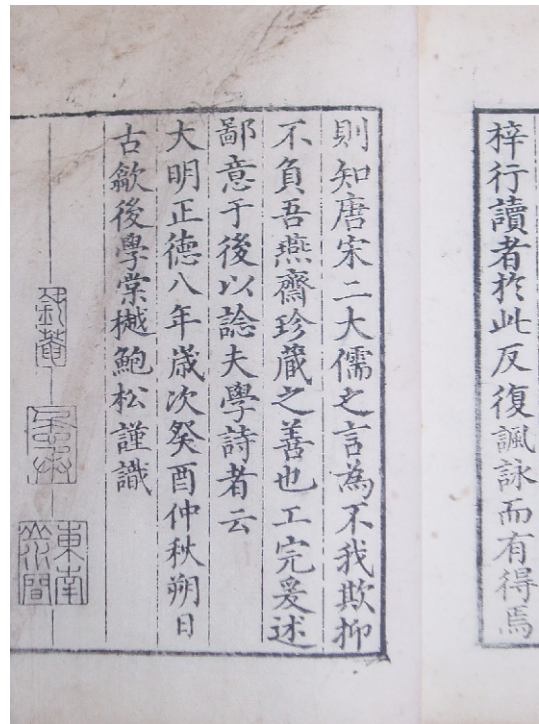
まず古版の部類に入りうるものでは、正徳十四年休寧知^{しんき}県沈圻刊本『楚辞（集注）』、および正徳八年古歛^{こきゆう}鮑氏刊本『杜工部集』の二部。



楚辞（集注）

前者は『楚辞（集注）』の明代初刻、少なくとも現存最古本たる成化刊本をもとにして刊行された本で、さすが良工を輩出した徽州（休寧は徽州府属）の刊本、なかなかの精刻である。わが国ではこの一本のほか、愛知大学、および国立公文書館に同版の蔵本があつて、必ずしも伝本絶少ではないが、版刻紙墨

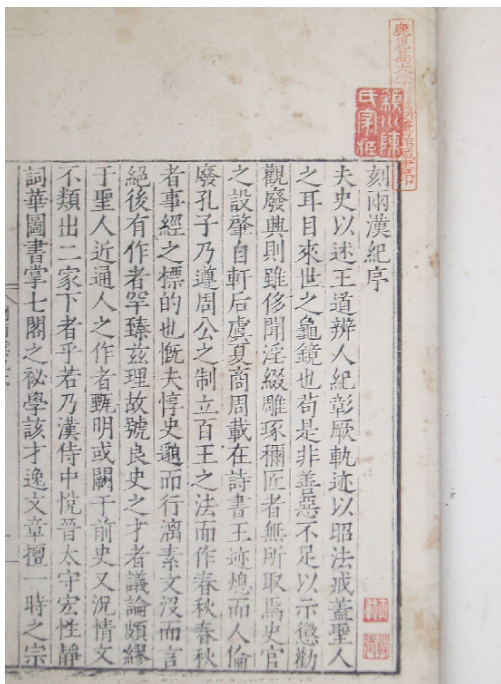
ともに優れた古版だけに、その文物的価値は高く評価してよい。また後者はというと、これもやはり古歛、すなわち徽州の鮑松という人が刊行した本で、実は李白と杜甫の集を合刻した『李杜全集』の、その杜甫の方だけを存したものながら、伝本は少なく私ははじめに見たし、版刻紙墨もやはり佳、これまた文物的価値からして善本に数えてよいだろう。



杜工部集

なお文庫目に正徳十四年書林龔氏刊本として著録される『慈溪黄氏日鈔分類』は、現物を見るに、残念ながら清代の覆刊本であつた。正徳原刊本はそう多くあるものではなく、私が目睹しえたのは神宮文庫、および静嘉堂蔵の二本のみ、しかも前者は後印で木記（刊記）の文字がすべて削られているし、未見ながら国立公文書館の蔵本も同様であるらしく、よつてもしこの本が原刊であるなら、相当の価値を誇りえたであろうが、そうはうまく行ってくれなかったわけである。ただ文物的価値はさしたることないにせよ、正徳本の姿をそのままに伝えるこの本は、書誌的な資料としてはなお有用で、原刊でないからまったく取るに足らず、ということでは決してない。

降って出版が大いにさかんとなりはじめた時期の、ということは伝本も格段に増加するため、古版とはふつう言わないのだが、テキストとして見るべきものが多く、版刻にも独特の風格が認められる嘉靖版では、呉県黄姫水刊本『兩漢紀』が優れるだろう。これは漢代史の古典著作、荀悦の『前漢紀』と袁宏の『後漢紀』を合刻したもので、特に後者の史料的价值は高く評価されているにもかかわらず、宋版は佚して伝わらず、現存する旧本としては、前者に正徳十五年何景明刊本があるにすぎない。しかもこの正徳本は伝鈔本（転写本）を底本としていて、校正者自ら「いまだ精本とはなさざるなり」と言っている（静嘉堂蔵本呂枏序）のである。

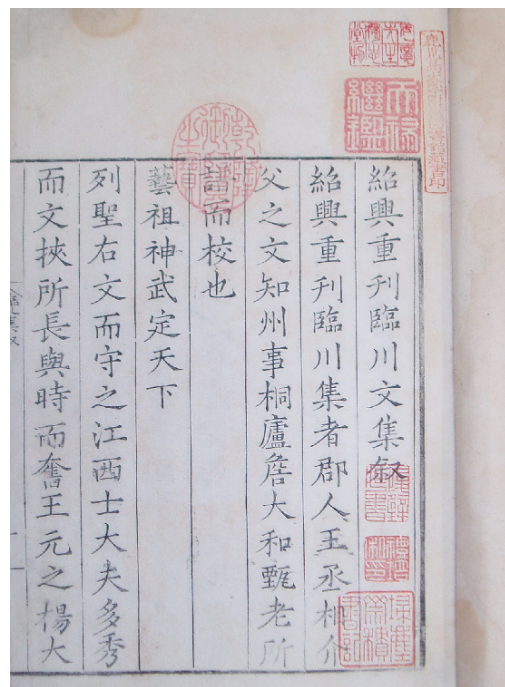


兩漢紀

それに対しこの本は、嘉靖二十七年の黄姫水序によるに、かつて雲間（松江）の朱氏という人が蔵していた内府旧蔵の宋版を、黄氏の父省曾が入手し、それを翻刻したのだという。すなわちこれは翻宋版であり、かつ『後漢紀』について言えば現存最古版となる。『四部叢刊』がこの本を採用するゆえんである。しかもこの嘉靖本、中国では特に珍しいというほどでもないが、わが国では見ること

すこぶる少なく、管見に入ったのはこの一本と静嘉堂蔵の二部（一は不全）くらい、そちこちに見られるものでは決してない。

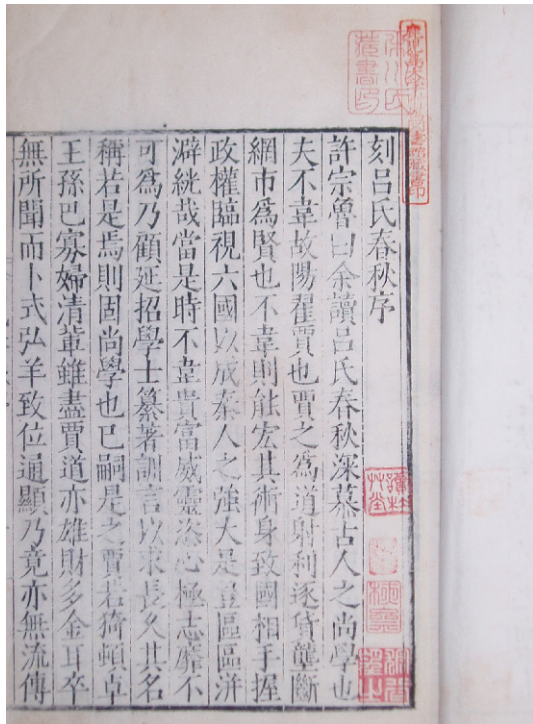
個別の版本につき語るべきことまだまだあろうが、紙幅もようやく窮屈になってきたので、あともう二点だけ。その一は嘉靖刊本『臨川先生文集』（王安石の詩文集）で、これは単純に版本として言えば、むろんつまらぬ本などでは決してなく、それどころか相当に高く評価される、立派な明版ではあるのだが、格別に注目されるというほどのことはない。王氏の集には宋版が二種現存し、詩集については元版もあるし、明版にしてもより古い本やほぼ同時期の本がいくつかあり、またこの版の伝本もある程度は数あるからである。



臨川先生文集

ただこの一本、毎冊の副葉に「五福五代／堂古稀／天子之宝」「八徴／はつちよう 毫念／もうねん 之宝」「太上／皇帝／之宝」の朱文大方印があり、首葉には「乾隆／御覧／之宝」「天禄／繼鑑」、末葉にやはり「乾隆／御覧／之宝」、および「天禄／りんろう 琳琅」印が朱鈐されている。すなわちこれは太上皇帝となった乾隆帝が、嘉慶初年に宮中昭仁殿に貯えた内府蔵本であ

り、その伝来から言って興味ある本と言えよう。なおこの本に見える蔵印には、他に「掃塵／斎積／書記」「礼培／私印」「口壁／蔵書」「无（無）竟／先生／独志／堂物」「無竟／先生／所宝」印があるが、どういう人のものか未詳。



呂氏春秋

もう一つは万暦七年揚州知府虞德燁資政左室刊本『呂氏春秋』で、これも単純に版本から言うなら、別段のことない。もっともこの虞氏刊本の日本における流伝は広からず、私は見たことがなかったので、それで特求めて披閱に及んだのだが、巻を開けるや目に飛びこんできたのは、「掖齋」「狩谷／望之」の二印であり、書末には「湯島狩／谷氏

求古楼／図書記」印もあった。つまりこれは狩谷掖齋がかつて蔵していた本にほかならず、やはりその伝来ゆえに、なかなか面白い本となろう。ただ残念なのは、この本に掖齋の批校などがなく、もしそうしたものがあれば、これはもう文句ない善本となるのであるが、今の場合そこまでのことはない。

なお狩谷氏以外の蔵印のうち、「読杜／草堂」「寺田／盛業」「字士弘／号望南」の三印は、明治期の蔵書家、といわんよりはブローカーのような人物であった寺田望南のもの。寺田氏の印はたいていの場合、本来の意味での収蔵印ではなく経售（取り扱い）印とでも言うべきもので、これもまず寺田氏の手を経て売られた本なのであろう。このほかの「市川氏／蔵書印」は誰氏のものか未詳、またもう一印はその文が読めなかった。

岩元文庫の漢籍が、全体としてなかなかの水準にあり、個別の本にも優れたものが含まれていることは、すでにある程度明らかになったであろう。とはいえ私が見たのは文庫のごく一部分にすぎず、ここにはまだまだ発掘すべき未知の事実が眠っているはずなのである。この小文が何ほどかの呼び水となって、文庫に対する興味、関心をもつ方がより多くなり、そうした方々によってさらに調査が進み、新しい「発見」が次々となされる、そうなることを心から願ってやまぬ次第である。

(いのうえ すずむ 名古屋大学大学院文学研究科教授)

岩元文庫の魅力—偉大なる暗闇と美しさ—

慶應義塾大学 高橋 智



岩元禎先生

鹿児島大学附属図書館に所蔵される岩元文庫の主人は、岩元禎という旧制第一高等学校の名物教授で、哲学者としてドイツ語の教鞭をとっていた先生である。明治二年鹿児島県に生まれ帝国大学の哲学科を卒業した。明治三十二年から大正・昭和の初めまで一高に在職、昭和十六年七十二歳で道山に帰したが、生涯独身、孤高の読書家として、数々のエピソードを遺し、凡人の到達し得ない境涯に遊んだ。その不思議な先生の生き様を当時の人は「偉大なる暗闇」と呼んだ。それは、二歳年長で、同じ頃一高に学んだ夏目漱石が、小説「三四郎」で、岩元先生をモデルに広田先生をえがき、学生の佐々木与次郎をしてこう言わしめた、とされるからである。この事情は、高橋英夫『偉大なる暗闇』（講談社文芸文庫）に詳しく述べられている。本書は、古きよき時代の理想主義を支えた本当のアカデミズムを彷彿させる、是非一読を薦めたい一書である。岩元先生は、志賀直哉にも相当の影響を与えたこと、また同じ頃、狩野亨吉（京都帝国大学学長・東北大学狩野文庫の主人）、栗野健次郎（仙台の旧制二高教授）など類似の暗闇が幾人も存在した

ことなど、高橋氏の著書によって先生の暗闇は、大分明るくなって来るようだ。

しかし、岩元文庫の漢籍を調べ出すと、この暗闇は再び闇となって、恐ろしいまでの漆黒に包まれてしまうのである。

漢籍の蒐集

先生は洋書がご専門であるから、洋書の選定蒐集は勿論、計り知れない眼力を以てされたことと思うが、今、遺されている先生蒐集の漢籍（漢文資料）は、我々漢籍の書誌学を専攻するものからみると、実に驚くべき実態を持っているのである。

端的に言えば、先生によって蒐集された漢籍は、四部（中国の伝統的図書分類法で経＝儒学・史＝歴史・子＝諸子百家・集＝文学の四部）に亘ってバランスよく、テキストの質もよく、初刷りの美本で、しかも由緒ある蔵書家の手を経ているものが殆どである、ということである。中国の近代に、国宝級の漢籍を数多所蔵していることで有名な蔵書家しゅうしゅくとうであった周叔弼は、書物の価値を人間の美しさに譬えて次のように言った。体格良く健康で才能を備え、化粧や服装が端正であること、書物で言えば字体・紙の質・かつてそれを読んだ人の気品・蔵書印・装訂、これらが全て美しく整っていること、これが善本と言われるための条件である、と。まさに先生の所蔵本はこれなのである。先生は何故これほどの漢籍への鑑識眼を持っていたのだろうか。

書誌学では、漢籍とは中国で清朝以前、日本では江戸時代以前に、手書きによる書写や、版木・木活字などによる印刷という前近代的な手法によって作られた中国の古典籍を言う。中国のものを唐本、日本のものを和本と言うが、先生の蒐集は専ら唐本が主である。

先生と同時期に唐本を蒐集していた学者に、経学の安井小太郎・島田鈞一・竹添井々・狩野直喜・林泰輔、史学の内藤湖南・市村瓊次郎、文学に古城貞吉・長尾雨山、書誌学の島田翰などがいたが、要するに錚々た

る漢学者であって、彼らは北京の本屋街・瑠璃廠や日本の取次の文求堂田中慶太郎に発注していたのである。先生も例に漏れず、同じ入手経路であったと思われるが、並み居る眼力の持ち主達と、購書を競うのは尋常な覚悟ではできないことであって、先生は何故そこまで専門外の漢籍善本購入にこだわったのか、闇である。しかも、その善本の質の高さは、漢学者好みのものが多く、漢学者の蔵書に優るとも劣らぬものであった。

蒐集の白眉

高橋氏が引くように、志賀直哉の作品に「ビーナスの割目」というのがあり、次のような話がある。志賀が骨董屋で気に入った石膏のビーナス像を買おうとした時、即座に先生は「買わんほうがいい」と進言した。ナイフでつけた割目があったからだ。先生が一目でそれを見つけたのが、志賀にとってとても印象的だったというのである。先生も先生なら、志賀も志賀で、興味深い話である。先生の蔵書の闇もこの辺にヒントがあるのかも知れない。

その珍奇な実例を少しく挙げてみよう。

『縮刻唐石経』（経37）は、熊本出身の幕末儒者松崎慊堂（一七七〇～一八四四）が今も西安に遺る唐の開成石経を模刻したもので、学術的評価が高く、西條・掛川・肥後・佐倉の各藩が出資して出版した当時としては国を挙げての難事であった。伝本は少ない。しかもこれは西條藩が所持していたものである。

漢学者なら誰でもが持っていた儒教の經典『十三経注疏』（経2・3）は、二セット、明の汲古閣本と清の阮元文選樓本を有し、この二本がふたつながら手元にあることが漢学者の冥利に尽きるものであった。これは数知れず日本に存在するが、先生のは初刷りの美しい版本で、前者は江戸の蔵書家鹿島清兵衛、後者は清の有名な学者龔自珍の旧蔵である。

宋の黄震の雑記集『黄氏日抄』（子4）は学者の読み物として啓発に富む名著であるが、先生の所蔵本は明の正徳十四年（一五一九）に書肆龔氏が出版したもので、蓮の花に囲まれた蓮牌木記という、出版事項を記した絵があり、明代特有のもの、本書の伝本も極

めて稀である。

『孟子』の権威ある注釈書『孟子正義』は著者焦循の家塾で出版された初刷り本で印面が晴朗、本書は清蘇州の有名な蔵書家潘介址の旧蔵。

明の万暦ころ（一六〇〇ころ）に張鼎思が編纂した筆記、『琅邪代醉編』（子17）は万暦の初版本で、これは竹添井々が手放したものである。

宋の王安石（一〇二一～一〇八六）の文集『臨川先生文集』（集22）は明の嘉靖時代（十六世紀前半）の出版で字も大きく立派な本である。特に本書は、「五福五代堂古稀天子宝」という清代きっての文人皇帝乾隆帝の所蔵だったもので、台湾の故宫博物院に石に彫られたハンが今も遺る。乾隆帝の印が日本で実際に見られるのは、これぐらいである。



臨川先生文集

清の、いや中国で最も有名な蔵書家・黄丕烈（一七六三～一八二五）は清代中期、宋時代の出版物（これを宋版といって、中国ではお宝中のお宝とする）を独り占めし、その蒐書力は皇帝も及ばず、天下に名を轟かせた。その黄氏が特に気に入った宋版を複製したのが『黄氏士礼居叢書』（叢3）である。その初刷り本は日本にも中国にもなかなか無い。あれば競って皆これを求めた。先生の本は綺麗な初印で、しかも清末の有名な蔵書家莫友芝の旧蔵本である。

『文選』爛して秀才相半ばす。『文選』は

漢学知識人の基本図書。中国でも日本でもどれだけの人が読んだことか。しかし、『文選』のよいテキストはなかなか手に入らない。十世紀ころ、中国五代の四川蜀の毋昭裔は貧乏なとき『文選』を読みたかったが誰も貸してくれなかった。そこで、発憤、宰相になって、『文選』を出版したと言う。先生の文選は『六家文選』（集34）という明の嘉靖時代の贅沢な本で、あらゆる注釈を備え、宋代の最善のテキストに基づいた大型の本で、個人の学者では持ち得ないほどの格式を持っている。この本は面白い。清末の本屋が出版年の箇所を切り取り、宋版に見せかけているのである。勿論、先生は騙されてはいない。

趣向と眼力

先生は唐の杜甫（七一〇～七七〇）に関心があったのだろうか。その詩文集はやや多い。明正徳八年（一五一三）刊の『杜工部集』（集8）、清康熙六年（一六六七）の『錢謙益注杜工部詩』（集9）、『杜詩詳注』『杜詩注解』など、稀書から基本図書まで、ひとつお集めている。

唐本は、宋・元時代の印刷本を特別本とすれば、それを所蔵するのは好機に恵まれる必要がある。しかし、明代のテキストとなると比較的多いので、眼力のある人は価値ある明版を発掘する。先生はそれが頗る顕著で、書誌学（中国では版本学という）に通じなければ、大枚をはたいて買おうという気が湧かないものだ。『張曲江集・張燕公集』（唐張九齡・張説の文集・明嘉靖十六年刊・集4）、『楚辭集注』（宋朱熹の著・明正徳十四年刊・集2）、『呂氏春秋』（明万曆刊・子16）、『兩漢紀』（明嘉靖刊・史17）等々。

乾隆帝が木活字で刷らせた優雅な活字本を「武英殿聚珍版」と称し、流伝が少ないため書物史上の大関となっているが、先生は『鶴冠子』（子15）、『兩漢刊誤補遺』（史16）、『水經注』（史22）、『続呂氏家塾詩記』（経10）と、意図的とも思われる蒐集をしている。

美の追究

学者の蒐書が美の追究とは何となく唐突に

思われるかも知れない。しかし、何と云っても、外観、見た目の美しさは唐本ならではの、中国の蔵書家を思わせるほど、先生は確実に、この美しさを追求して蒐書に当たっている。表紙は原装といい、出版された初刷りの時のままを善しとする。明の万暦年間に北京の国立大学で出版した『二十一史』（『史記』以下歴代中国の歴史書・史1）は万暦時の表紙がそのまま、『史記評林』（万暦四年刊・史10）もそうである。『憺園文集』（清徐乾学の文集・清康熙刊本・集30）も当時の茶色がそのままである。こうした例は枚挙に暇がない。何しろ、中国は木版印刷において、版木を大切にし、何度も何度も刷り、数百年は普通に刷り続けるから、唐本は印刷が汚いものが多い。先生の蔵書はどれも初刷りの美しい装訂を持ち、嘆息するばかりだ。そして、中国の学者は美しい本を大切にしたので、先生の本には、必ずといっていいほど、中国人のこれまた美しい蔵書印が捺されてある。

清の康熙帝の時代に編纂された詩文作製の為の百科事典『佩文韻府』（子21）は、正に康熙五十年（一七一〇）ころの初版・初刷りの逸品である。特に読まれ使われるのがこの種の書物の目的で、美しいものは無いのが普通である。これは特別だ。しかも、六冊くらいをひとやまとして、特製の麻布で作られた袋（布帙という）に包み込んでいる。一袋ごとに絹を貼り目次を墨書している。この布帙は他に見たことがない重々しいものである。おそらく皇帝への献上用に作られた宮中の仕業だと思う。そこには絶大な権力を誇った皇帝時代の奥深い美しさが見える。この本は、功あった役人が皇帝より下賜されて大切にしてきたものであろう。こうした蔵書はみな、北京の瑠璃廠の由緒ある書肆を経て先生が選ばれたのに違いない。

先生は西洋の美を、東洋の書物の美のなかに見ようとしていたのではないだろうか。

岩元文庫の偉大なる暗闇は、近代アカデミズムの象徴として、永く、語り継いでいってほしいものである。

（たかはし さとし 慶應義塾大学附属研究所斯道文庫准教授）

平成19年度貴重書公開

貴重書公開では、「没後120年 島津久光 玩古道人（がんこどうじん）の実像」というテーマで、玉里文庫の所有者であった島津久光を初めて正面から取り上げました。展示会では、島津久光の学問的及び文化的な実績をたどるとともに、実像に迫ることのできる資料を展示しました。

また、講演会では島津久光と同時代を生きた篤姫をテーマに選び、参加者の関心を惹きました。

<鹿児島大学会場>

【展示会】10月17日（水）～21日（日）10時～17時：附属図書館1階アトリウム

【記念講演】10月21日（日）14時～17時：附属図書館5階ライブラリーホール

『島津久光 人と学問』

丹羽 謙治（鹿児島大学法文学部准教授）

『島津久光と篤姫－時代をまたいだ殿と姫－』

原口泉（鹿児島大学法文学部教授）

<始良町会場>

【展示会】11月9日（金）～23日（日）10時～17時：始良町歴史民俗資料館2階展示室

【記念講演】11月23日（日）14時～17時：始良町中央公民館2階大会議室

『篤姫の結婚－幕末維新の伏流水－』

寺尾美保（尚古集成館学芸員）

『島津久光 人と学問』

丹羽 謙治（鹿児島大学法文学部准教授）

開催にあたって

鹿児島大学会場では、「NPO法人 まちづ

くり地域フォーラム・かごしま探検の会」の協力を得て、会場説明を一部担当していただいた。また、始良町会場では、始良町教育委員会と連携して、始良町歴史民俗資料館を会場に利用させていただき、同町の郷土史研究グループの方々に会場説明を担当していただきました。

なお、鹿児島県教育委員会及び南日本新聞社から後援をいただきました。

展示資料について

附属図書館所蔵の玉里文庫を中心に展示しており、丹羽准教授が玉里文庫から発見された「越前島津家奥祐筆日記」も展示しました。

参加状況

鹿児島大学会場では展示会に222名の参加、講演会に54名の参加がありました。また、始良町会場では展示会に270名の参加、講演会に75名の参加がありました。



平成19年度貴重書公開記念講演会『島津久光 人と学問』講演要旨

丹羽 謙治

平成19年は島津久光の没後120年（生誕190年）に当たる。これを記念して今年の企画を行った。今回は玉里文庫の中にある久光の自筆本を中心に、久光の人生を大きく三つに分け、大きく時代が転換していくなかにあって久光がどのような生涯を送ったのか、彼の学問と人となりを中心に述べていく。

今年の展示では久光の養子先である越前

（重富）島津家の奥祐筆日記を公開した。久光の蔵書『誠忠武鑑』（五巻八冊）の裏打ち紙として使われていたもので、3年前の貴重書公開の準備の際にその存在に気づき、綴じ糸を切って調査を行ったものである。本日記は近世薩摩の上級武家の生活のありようを垣間見ることができる珍しい資料である。久光の生まれる数年前の越前島津家の記録ではあ

るが、これによって若き日の久光の日常を推測することもできるので、その一端を可能な限り紹介したい。

まず、「越前島津家奥祐筆日記」について。本日記発見のいきさつや年代判定の方法等を述べた後、その内容について（1）年中行事（2）冠婚葬祭（3）娯楽・信仰（4）その他に分けて紹介した。年中行事では、節句のほか、初夏に行われた茶取（茶摘）、六月灯の記事を見た。六月灯は邸内に勧請してある稻荷や弁天で行事が行われていた。冠婚葬祭では、前妻が亡くなった若き当主（忠貫）が服喪中、内々に祝言を挙げていたことや、今和泉家との婚姻が同時に二組、藩から承認を受けたという記事を紹介した。これは一門家の間の緊密な結びつきを思わせるものであった。娯楽・信仰としては、寺社参詣や伊勢講、日待などの民俗・宗教行事がしばしば見られることのほか、厄年の行事として「矢数」「日待」が行われていることなど民俗資料として本日記が貴重であることを指摘した。その他に、藩主斉興の後見人として文化10年に帰国した島津重豪（「大御隠居様」）にお目見に赴く越前家当主の様子や贈答品の数々についても紹介した。

次に、島津久光の学問について、若い日の学問環境や学問態度などについて紹介した。久光は9歳にして越前家の養子となり、その後、学問の師や「御付」と呼ばれる学友が付けられた。師については、儒学（歴史）・漢詩文・和歌・書道それぞれに師がつけられたことがわかっているが、『西藩烈士干城録』所収の「迂愚上原居士之墓」と題する文章から久光が大きな影響を受けたと考えられる上原尚賢、児玉俊之（頑翁）の個性的な文人氣質を見た。久光の学問は彼を取り巻く藩士たちと書籍のうちに限られていた（その意味では兄の斉彬が江戸において蘭学をはじめとす

る最先端の学芸の息吹に触れていたのとは著しい対照をなす）といえるが、その結果、久光は島津家の歴史研究に精力を傾けるに至り、また典籍資料の収集に力を入れていくことになる。しかし、彼には中央に出たいという強い思いがあった。それは『西の海蟹の轉』の中の述懐の歌（「ゆきてみんとおもひし物をうき雲のいかにへだつる東路の空」ほか二首）によく現れている。久光は文久年間に国事周旋のため乾坤一擲上京を試みるが、その情熱は若き日の久光にすでに滾^{たぎ}っていたともいえる。

彼は藩の外に出ることがかなわない分、極めて精力的に学問に励んだ。それは玉里文庫に残っている多数の自筆草稿によって明らかである。久光自筆の写本は玉里文庫の地の部に多く収められているが、筆写年代を探ってみると、天保11年（1840）から弘化2年（1845）にかなり集中しており、薩摩の歴史に関するものと和歌集が中心であることが明らかとなる。写本は几帳面な文字で書かれており、諸本を校訂するなど久光が学者肌の人間であったことをうかがわせている。

最後に久光と出版と彼の思想について。久光は、幕末期に平田国学に惹かれていた形跡がある。彼が国父として実質的に藩政を主導することがかなうようになると、寺院統合令を発し、後の廃仏毀釈へと繋がる施策を行い、一方では久光の強い嗜好が反映された出版物の刊行を行っていく。久光の考えていた新しい国家像は古代回帰的な政治体制であったと考えられるが、『職原鈔私記』『軍防令講義』『天の逆鋒図』などは久光の志向するものが何であったかを象徴しているといえるだろう。

（にわ けんじ 法文学部准教授）

◆◆◆◆◆南日本新聞データベースの導入◆◆◆◆◆

◆◆◆◆◆平成19年12月より、南日本新聞社の新聞記事フルテキストデータベース（学内限定）の運用を開始しました。南日本新

◆◆◆◆◆聞社の記事だけでなく、共同通信社配信の記事の検索と閲覧ができます。

◆◆◆◆◆丹羽先生の「奥祐筆日記発見」の記事も閲覧できます。

鹿児島大学リポジトリの紹介

『鹿児島大学リポジトリ』とは

鹿児島大学で創造された学術成果（研究論文・学位論文・研究報告書等）を収集・蓄積・保存し、学内外に無償でweb発信するものです。平成18年度より構築が開始され、平成19年4月より正式に公開（<http://ir.kagoshima-u.ac.jp/>）しております。

同種のもは、機関リポジトリとして国内外の大学等で運用され、国内では平成20年3月現在で、70以上（試験公開中を含む）のものが稼働しています。

リポジトリのメリット

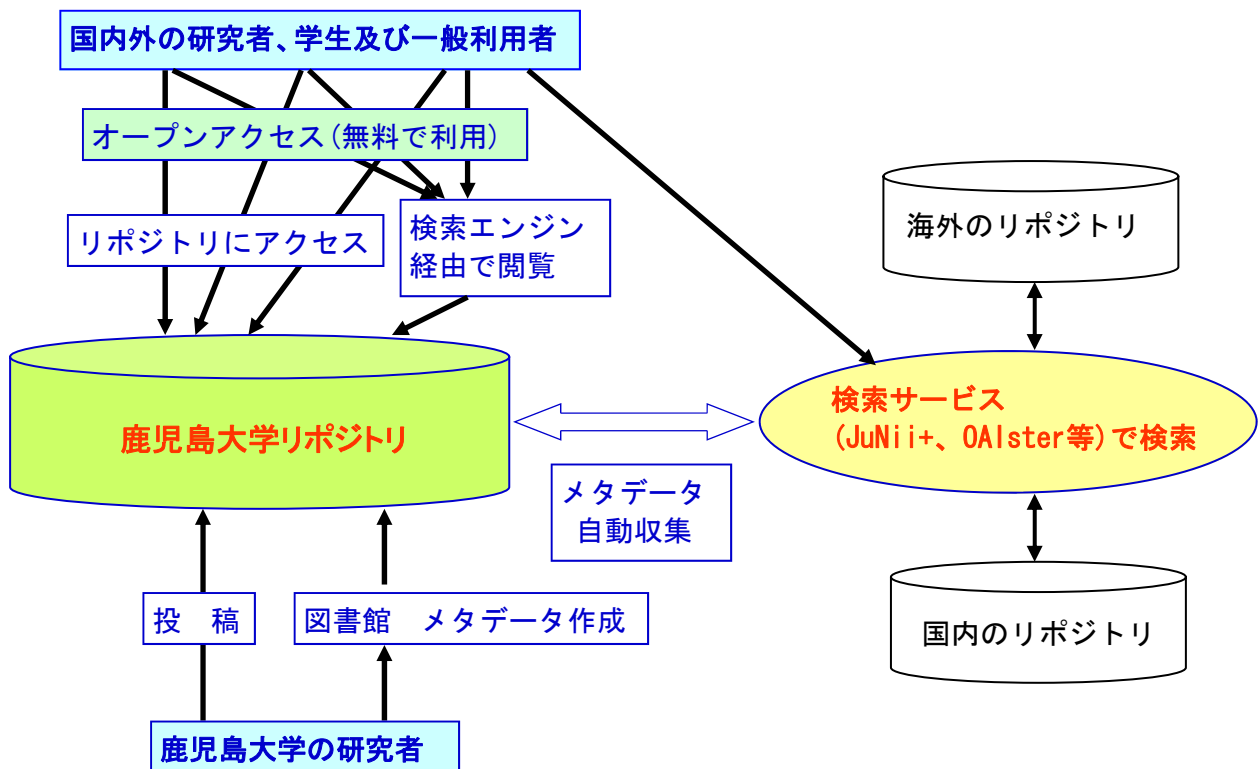
リポジトリに学術成果をコンテンツとして登録しておくこと、鹿児島大学及び附属図書館のホームページからリポジトリのページにアクセスし、検索することができます。また、リポジトリ内のコンテンツは各種検索エンジン（サービス）の検索対象となっており、効果的な情報発信ができます。

<研究者にとって>

- ・研究成果の可視性が高まる
- ・研究成果の新たな発信ルートが確保できる

<大学にとって>

- ・学術成果を一元的に保存することにより、散逸を防ぐことができる
- ・大学の教育・研究活動を広くアピールすることができ、説明責任を果たすことができる



<用語解説>

- ・メタデータ：論文に関するタイトル、著者、掲載誌、掲載ページなどの情報
- ・JuNii+：国立情報学研究所の提供する機関リポジトリのポータルサービス
- ・OAIster：ミシガン大学の提供する世界中から収集したメタデータの検索サービス

掲載コンテンツ数（平成20年4月現在）

- ・ 紀要論文（2,762件）
- ・ 学位論文（21件）
- ・ 学術雑誌論文（75件）
- ・ 会議資料（13件）
- ・ 科研費報告（2件）
- ・ 講義教材（3件）
- ・ 貴重資料その他（54件）

現状では、まだリポジトリは学内での認知度が高いとはいえません。リポジトリはコンテンツの質及び量が重要です。現在、学内で生産される学位論文の収録を行っていますので、ご協力をお願いいたします。国内にはリポジトリの収録論文数が1万件を超している大学があります。研究成果がリポジトリに収録されると、被引用率が高まると言われています。

鹿児島大学リポジトリの機能

- ・ 著者名、キーワード、出版社などによる詳細検索
- ・ 著者や収録種別による一覧表示
- ・ 所属別による一覧表示

著作権について

紀要論文、雑誌論文、博士論文など種別により、著作権者が異なります。著作権が著者本人にある場合は、著者の許諾により公開が可能です。著作権が出版社や学会にある場合は、出版社や学会の許諾があれば公開可能です。

学位論文提出のお願い

今後、発行される紀要論文のリポジトリへの収録を行うとともに、平成19年度より、学位論文（博士論文）の収録に力を入れています。平成20年2月より募集を行っておりますが、まだ提出数が多くありません。ご協力をお願いします。

コンテンツの提出

鹿児島大学リポジトリにログインして直接コンテンツをオンラインで登録する方法もありますが、コンテンツを図書館の担当係に送付する方法をお勧めします。

問い合わせ先

自分の書いた論文をリポジトリに掲載してみたいがその方法がわからない、著作権が気にかかるなど疑問や質問がありましたら、ご遠慮なく学術情報部情報管理課学術コンテンツ係（099-285-7445、ir@lib.kagoshima-u.ac.jp）にご連絡ください。



教育・研究成果をリポジトリで発信しましょう！

学生モニターの活動

附属図書館では図書館運営に対し、利用者による評価を採り入れ、利用者サービスの向上及び改善を行うことを目的として、平成19年度より学生モニター制度を導入しました。平成19年度については、附属図書館運営委員の推薦と学生の方の自薦により、計22名の方が参加してくれました。

平成19年度の学生モニター活動としては、学生モニター懇談会の開催とアンケート調査を行いました。

1 学生モニター懇談会

(1)開催

①中央図書館（10月12日（金）、学生モニター参加者6名）

②桜ヶ丘分館（同月18日（木）、学生モニター参加者3名）

(2)意見（抜粋）

・図書館の活動は館内やホームページでのお知らせだけでなく、学生の多く集まる場所でも掲示してほしい（中）

・分野で標準的な図書は複数冊あったほうが良い（桜）

・図書は貸出用と貸出用でないものがあるといい（桜）

・作成資料をわかりやすくしてほしい（桜）

・閲覧席はもっとあったほうが良い（桜）

・閉館時間を遅くしてほしい。24時間開館だともっといい（桜）

※（中）とは中央図書館、（桜）とは桜ヶ丘分館での意見を指します。

(3)対応

モニターの方の意見をとおして、改めてシラバス対応図書の必要性がわかりましたので、図書館全館でシラバス対応図書を複数冊購入することとし、1冊を貸出用、もう1冊を館内利用のみとし、シラバス対応図書の安定的な利用をできるようにしました。さらに、中央図書館3階にシラバスコーナーを設置し、シラバス対応図書の利用向上を図りました。

2 アンケート調査の実施

(1)第1回 図書館ホームページ（試行版）について（10月）

①内容：更新予定の図書館ホームページ、新規作成の英語版ホームページのチェック

②回答者：学生モニター10名その他

③意見（抜粋）

・メニューは英語表記よりも日本語表記が良い

・視聴覚資料の利用について説明が必要

・書籍や文献について意見交換のできる掲示板やBBSがあればよい

④対応

・メニューの表記を日本語としました

・視聴覚資料の利用について説明を加えました

(2)第2回 学生用図書について（12月）

①内容：必要とする学生用図書及び参考図書について、また、職員選定の参考図書の購入の必要度について

②回答者：学生モニター10名その他

③意見（抜粋）

・古い本が多いから、新版を増やしてほしい

・中途半端に集められた本が目につく。揃っていないと意味がないのできちんと揃えてほしい

・生物化学実験法シリーズは使い勝手がよい。桜ヶ丘や水産にしかないものがあり、中央図書館で揃えてほしい

④対応

・人文系図書、生物化学実験法シリーズなど計約30冊購入し、学生用図書を充実させました

・参考図書を約30タイトル購入しました

(3)第3回 図書館作成資料について（2月）

①内容：図書館利用案内（中央図書館、桜ヶ丘分館、水産学部分館）及び「鹿大生のための図書館情報活用ハンドブック」について

②回答者：学生モニター5名

③意見及び対応

「利用案内」について表記の修正を求める意見があり、適宜変更しました

平成19年度の学生モニターとして活動された方々や学生モニターに協力してアンケートに答えてくれた方々には、この紙面を借りて、お礼を申し上げます。

附属図書館では、平成20年度も学生モニターの方々と一緒に利用者サービスの向上をあたります。

本学関係者から寄贈された著書（平成18年12月～平成20年3月）

中央図書館

竹岡 健一(法文学部教授)

ルイーゼ・リンザーとナチズム：20世紀ドイツ文学の一側面 / 竹岡健一[著] 西宮 関西学院大学出版会, 2006

千葉 義也(教育学部教授)

アーネスト・ヘミングウェイの文学 / 今村橋夫 [ほか] 共著 京都 ミネルヴァ書房, 2006. 11

坂脇 昭吉(教育学部教授)

現代日本の社会政策 / 坂脇昭吉, 阿部誠編著 京都 ミネルヴァ書房, 2007. 4

永田 行博(前学長)

日々変わりゆく時：大学と私の春夏秋冬 / 永田行博著 鹿児島 南日本新聞開発センター(製作), 2007. 3

神田 嘉延(教育学部教授)

暮らしと民主主義の大学創造：地方大学と生涯学習 / 神田嘉延著 東京 高文堂出版社, 2005. 7

学校再生論の礎石：人間・国家・地域と学校 / 神田嘉延著 東京 高文堂出版社, 2006. 4

土田 充義(名誉教授)

聖堂再生 / 松山ちあき [ほか] 共著 福岡 NPO法人文化財保存工学研究室, 2007. 3

後藤 正道(医歯学総合研究科准教授)

総説現代ハンセン病医学 / 牧野正直[ほか] 編集 秦野 東海大学出版会, 2007. 2

片岡 美華(教育学部講師)

オーストラリアにおける「学習困難」への教育的アプローチ / 玉村公二彦, 片岡美華著 京都 文理閣, 2006. 8

下原 美保(教育学部准教授)

装い：日本女性の美 / 福岡市博物館編 [福岡] 福岡市博物館, 1995. 8

高津 孝(法文学部教授)

中国古典文学批評史 / 周勛初著；高津孝訳 東京 勉誠出版, 2007. 7

大高 武士(工学部助教)

失敗しない機械製図の描き方・表し方 / 中西佑二, 池田茂, 大高武士著 東京 日刊工業新聞社, 2007. 8

種村 完司(教育学部教授)

コミュニケーションと関係の倫理 / 種村完司著 東京 青木書店, 2007. 8

深見 聡(教育学部非常勤講師)

地域コミュニティ再生とエコミュージアム / 深見聡著 相模原 青山社, 2007. 4

村島 定行(工学部教授)

学問のすすめ：日本の未来を拓く / 村島定行著 東京 星雲社(発売), 2007. 10

細川 道久(法文学部教授)

カナダ・ナショナリズムとイギリス帝国 / 細川道久著 東京 刀水書房, 2007. 10

カナダの歴史がわかる25話 / 細川道久著 東京 明石書店, 2007. 8

渡辺 芳郎(法文学部教授)

薩摩川内市平佐焼窯跡郡の考古学的研究 / 渡辺芳郎編著 鹿児島 鹿児島大学法文学部人文学科異文化交流論研究室, 2007. 12

鳥居 朋子(教育学部准教授)

戦後初期における大学改革構想の研究 / 鳥居朋子著 東京 多賀出版, 2008. 1

大林 和子(教育学研究科修士課程)

障害者福祉の研究課題と方法 / 高木邦明, 福永良逸, 茶屋道拓哉 [ほか] 共著 東京 学文社, 2007. 12

原口 泉(生涯学習教育研究センター長)

篤姫：わたくしこと一命にかけ：徳川「家」を守り抜いた女の生涯 / 原口泉著 東京 グラフ社, 2008. 1

細川 道久(法文学部教授)

新版 史料が語るカナダ：16世紀の探検時代から21世紀の多元国家まで：1535-2007 / 日本カナダ学会編 東京 有斐閣, 2008. 1

小栗 実(法文学部教授)

新・検証日本国憲法 / 小栗実編著 京都 法律文化社, 2007. 9

鮫島宗一郎(工学部)

無機材料化学 第2版 / 荒川剛 [ほか] 共著 東京 三共出版, 2005. 5

桜ヶ丘分館

北島 信一(医学部・歯学部附属病院 病理部助教)

後藤 正道(医歯学総合研究科准教授)

総説現代ハンセン病医学 / 牧野正直 [ほか] 編集 秦野 東海大学出版会, 2007. 2

永田 睦(医歯学総合研究科非常勤講師)

暫間ミニインプラント療法～臨床を変える新次元の包括的治療法 / 永田睦著 京都 永末書店, 2007. 8

島田 和幸(歯学部教授)

明治期に出版された解剖学書および解剖学に関する書 / 島田和幸著 鹿児島 ナカバヤシ(印刷), 2008. 2

トピック

中央図書館の開館時間の延長

4月1日(火)より、休業期を除き、中央図書館の平日の開館時間を8時30分から21時30分まで(従来より1時間30分延長)としました。土・日については、10時から18時までの開館(従来より1時間延長)としました。

また、平日の17時から18時30分まで、新たに利用相談(レファレンス)サービスを行っています。皆さん、図書館を自学自習、調べ物等に活用してください。

情報リテラシー支援活動の展開

附属図書館では、学生の方にとって、初年次から図書館(資料)を活用することが自主的な学習活動に役立つとの考えに基づき、情報リテラシー支援活動を展開しています。

4月には、館内を案内しながら、図書館の利用法、資料の配置などを説明する「図書館利用案内」を実施しました。

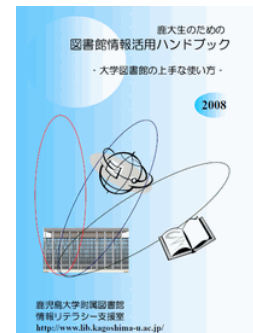
5月から6月にかけては、共通教育科目「情報活用基礎」授業と連携した図書館情報活用ガイダンスを実施しています。このガイダンスでは、図書や雑誌の探し方、論文の探し方などを説明し、実習を行っています。

6月以降、学生の方を対象とした図書館情報活用ガイダンスを開催いたしますので、ぜひご参加ください。開催のご案内は図書館のホームページ、館内や学部での掲示により行います。

『鹿大生のための図書館情報活用ハンドブックー大学図書館の上手な使い方』の発行

情報リテラシー支援活動の一環として、2年前に発行した『鹿大生のための図書館をもっと活用する本 2006』の改訂版を発行しました。内容は、図書館情報活用ガイダンスで説明することをわかりやすくまとめたものです。

この冊子は附属図書館各館で入手できます。また、ホームページからダウンロードすることもできますので、どうぞご利用ください。



展示会の開催

中央図書館では1階アトリウムで展示会を開催しました。

○『波濤を越えて』写真展

期間：3月28日(金)～4月21日(月)

○鹿児島大学学友会美術部美術展

期間：4月2日(水)～4月16日(水)

展示作品募集中

中央図書館では、1階アトリウムで展示する作品(写真や絵画など)を学内で募集しております。希望される方は、資料サービス係(内線：7435、あるいはカウンター)にお申し込みください。